



2005年11月11日



独立行政法人 奈良文化財研究所  
飛鳥藤原宮跡発掘調査部

### 雷丘の歴史

雷丘は甘檜丘から続く丘陵地帯の先端に位置し、飛鳥地域から藤原京一帯を一望できる高さ約20mの独立丘です。また、古代の幹線道路である阿倍山田道と飛鳥川が交わる交通の要衝ようしゅうに位置しています。『万葉集』にも詠まれた雷丘は、『日本書紀』や『日本霊異記』にも登場します。丘の上を発掘するのは、今回が初めてですが、周辺の発掘調査では飛鳥時代の建物跡が確認されています。また、周辺の調査で埴輪が多く出土していることから、雷丘が古墳である可能性も指摘されていました。そして、中世には雷丘は城郭としての役割を担っていたこともわかっています。見晴しの良い場所ですから、周辺から敵が攻めて来ないか、物見台の役割を果たしていたのでしょうか。今回の発掘調査では、雷丘の歴史の一端をひも解くことができました。

### 発掘調査の成果

西側斜面からは多数の円筒埴輪の破片が出土しましたが、古墳と明言できる遺構はありませんでした。しかし、これらの埴輪は雷丘の周辺の調査で出土しているものと似ていて、5世紀後半のものです。5世紀後半というのは雄略天皇の御代めうりゃくですから、『日本書紀』や『日本霊異記』にも登場する雷を捕えた伝承の時期とも合致します。推測の域をでませんが、ここにあった5世紀後半の古墳が、伝承となんらかの関連があるのかもしれない。

飛鳥時代（7世紀）になると、『万葉集』巻3に「天皇、雷岳に御遊しし時、柿本朝臣人麿の作る歌一首」が詠まれています。

大君は 神にし座せば 雨雲の 雷の上に 廬いほりせるかも

周辺では飛鳥時代の遺構も見つかっていますから、ここに大君の廬いほりが存在するのではないかと想像されてきましたが、残念ながら今回の調査では古代の遺構は見つかりませんでした。

中世（おそらく15世紀頃）に城郭を造る工事は大規模なものでした。深さ約2メートルに及ぶ薬研堀やげんぼりと呼ばれるV字形の堀を丘の中央と東側に巡らせ、丘の上は平坦に切られました。丘の中腹には武者走りむしやばしや腰郭こしぐるわとみられるテラスを、丘を削り出して造っています。このときの大規模な工事で、古い時期の遺構は壊されたと考えられます。

## 飛鳥の展望台「雷丘」

立地条件と眺望の良さから、古墳が造営されたり、天皇が廬を造ったと詠まれたり、中世には城郭が築造されるなど、雷丘は飛鳥を見守る展望台のような役割を果たしてきたことが明らかになりました。これからも雷丘は飛鳥を代表する歴史の丘として、飛鳥を見守り続けることでしょう。



東側でみつかった薬研堀



西側でみつかった石組遺構



中央部分 耕作溝や小穴



北側の斜面 武者走り？



東側の作業風景



西側の作業風景

## 雷丘に関する伝承

### ●『日本書紀』雄略7年7月丙子条

雄略天皇は少子部連ちいさごべのむらじすがる螺みもろのおかに詔して、「私は三諸岳の神の姿を見たいと思う。おまえは筋力が人に勝っている。自分で行って捕らえて来い」と仰せられた。螺すがるは答えて、「試しに行つて捕らえてみましょう」と申しあげた。そして三諸岳に登り大蛇を捕らえて天皇にお見せした。天皇は齋戒なさらなかつた。大蛇は雷音とどろを轟かせ、目を爛々と光らせた。天皇は恐れて、目を覆つてご覧にならず、殿中に退き隠れ、大蛇を丘に放させなされた。そして改めて名をお与えになつて雷とした。」

(『新編日本古典文学全集3 日本書紀②』小学館1996より一部改変)

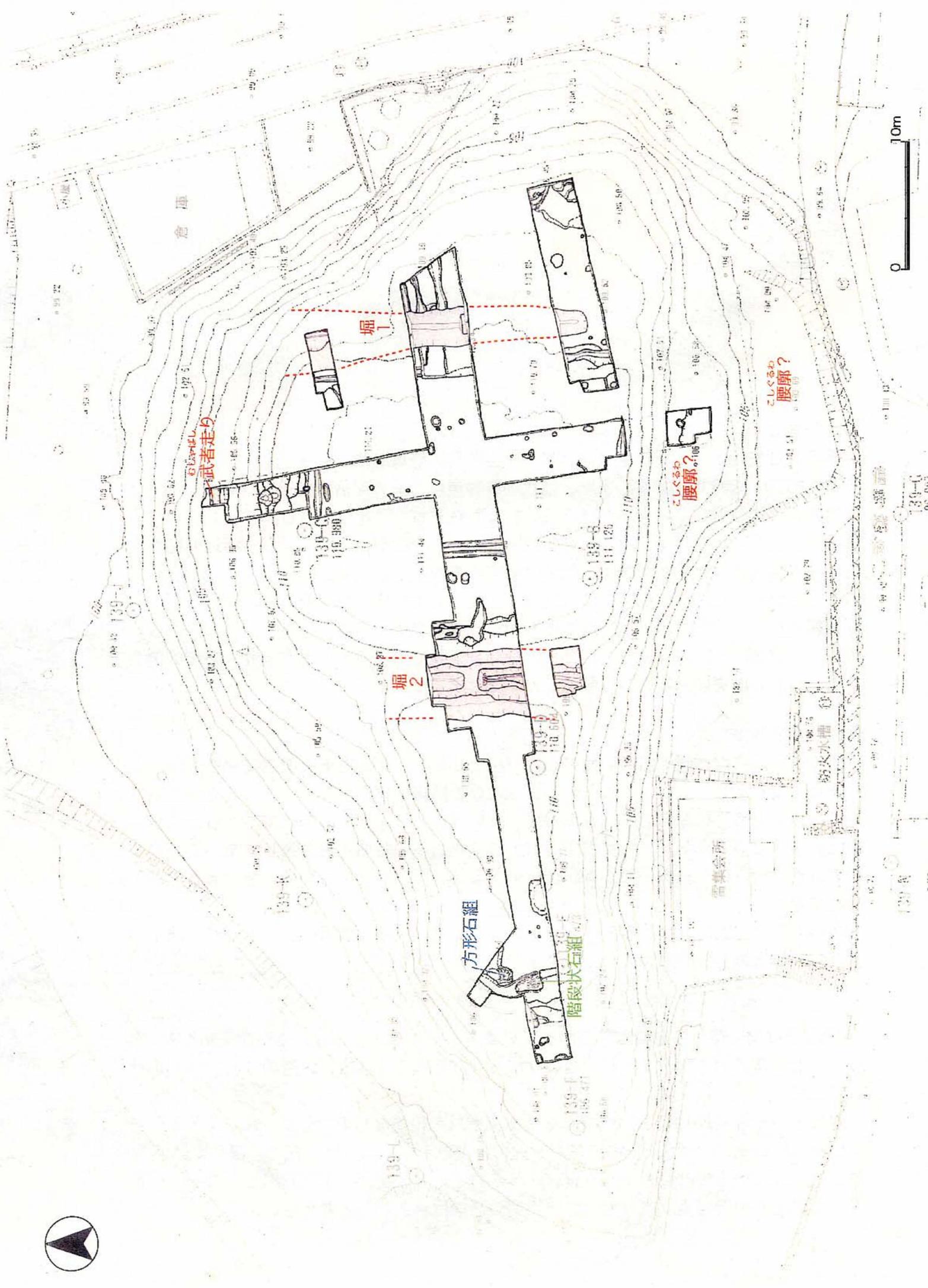
### ●『日本靈異記』上巻 雷を捉へし縁 第一

小子部のりょういき栖ちいさごべ軽すがるは、初瀬にあった朝倉の宮で二十三年の間、天下をお治めになつた雄略天皇の護衛官で、天皇の腹心の侍者であつた。天皇が磐余の宮に住んでおられた時のこと、后きさきと宮殿で一緒にお寝みになつておられたのを、栖軽はそれとも気づかず、不意に御殿に入つてしまった。天皇は恥ずかしがつて、そのまま事をやめてしまわれた。

ちょうどその時、空に雷が鳴つた。天皇は栖軽に、「おまえは雷をお連れしてこられるか」と仰せになつた。栖軽は「お迎えして参りましょう」とお答えした。天皇は、「ではおまえ、お連れしてこい」とお命じになつた。栖軽は勅命を受けて、宮殿から退出した。赤色の鬘かづらをひたいにつけ、赤い小旗をつけたほこを持って馬に乗り、阿部村の山田の前の道から豊浦寺の前の道を走つて行つた。軽のもろこし諸越の町なかに行き着くと、「天の鳴神よ、天皇がお呼びであるぞ・・・」と大声で呼んだ。そしてここから馬を引き返して走りながら、「たとえ雷神なるかみであっても、天皇のお呼びをどうして拒否することができようか」と言つた。走り帰つてくると、ちょうど豊浦寺と飯岡との中間の所に、雷が落ちていた。栖軽はこれを見て、ただちに神官こしを呼んで、雷を輿に乗せて、宮殿に運び、天皇に、「雷神をお迎えして参りました」と申しあげた。その時、雷は光を放ち、明るくパツと光り輝いたのであつた。天皇はこれを見て恐れ、たくさんの供え物を捧げて、雷を、落ちた所にお返しなされた。その落ちた所いかずちを今でも雷の岡と呼んでいる。飛鳥の都おはりだの小壘田の宮の北にあるという。

その後、何年かたつて栖軽は死んだ。天皇は命じて遺体を七日七夜仮葬にして祭られ、栖軽の忠信ぶりをしの偲しのばれ、雷の落ちた同じ場所に彼の墓を作られた。栖軽の榮譽を長くたたえるために碑文を書いた柱を立てて、そこに「雷を捕えた栖軽の墓」と記された。雷はこの碑文を立てたのを憎み恨んで雷鳴をとどろかせて落ち下り、碑文の柱を蹴とばし、踏みつけた。ところが、ぎゃくに雷は柱の裂け目にはさまれて、ふたたび捕えられてしまった。天皇はこれをお聞きになり、雷を裂け目から引き出して許してやった。雷は死を免れた。しかし雷は七日七夜も放心状態で地上に留まっていた。天皇は勅を下して、もう一度、碑文の柱を立てさせ、これに、「生きている時ばかりでなく、死んでからも雷を捕えた栖軽の墓」と書いた。世間でいう古京の時、つまり飛鳥京の時代にこの場所が雷の岡と名づけられた話の起りは、以上のような次第である。

(『新編日本古典文学全集10 日本靈異記』小学館1995より一部改変)



0 10m

139-G  
99.9m

139-N

防火水槽

雷集会所

倉庫

武者走り

堀1

堀2

方形石組

階段状石組

こしくらわ  
腰廓?

こしくらわ  
腰廓?